

心友会だより

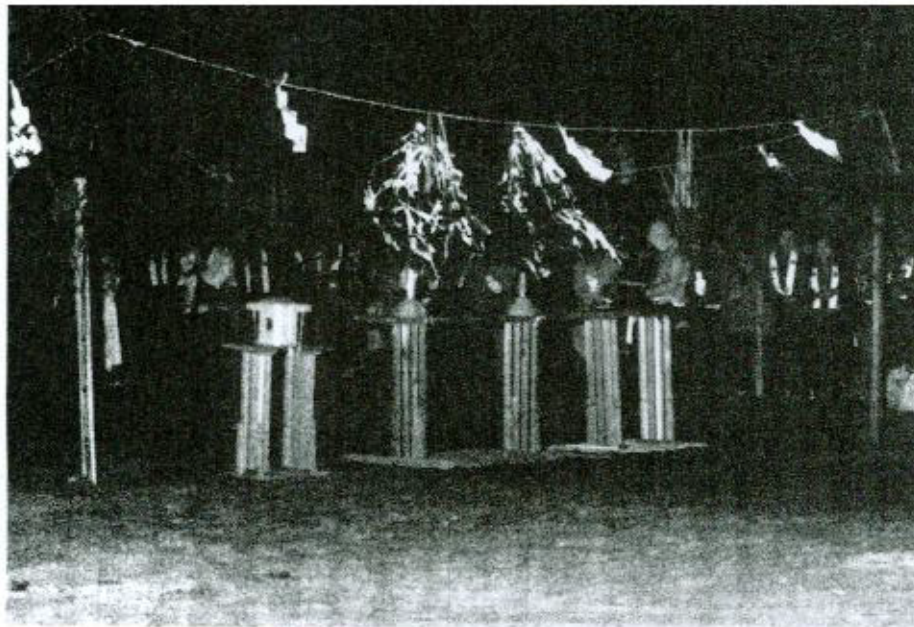
第 376 号

昭和44年6月1日創刊
平成17年11月8日発行
発行所及責任者
川崎市多摩区東生田4-13-17
電話番号 044-976-0708
郵便番号 214-0031
宗教法人 出雲心友教会
編集 佐藤武彦
毎月8日1回発行
1部150円 (送料共)
年間購読料1,800円

出雲の神迎

出雲地方では、旧暦の十月を神無月と呼びます。

十月を「神無月」と呼ぶのは、日本全国の神々が出雲へ行かれ、その土地を留



稲佐の浜での神迎神事より

守にする為です。

逆に出雲地方は神々がお集まりになられるので、「神在(有)月」と呼んでいきます。

毎年出雲大社に参拝するとき、漸く「お国帰り」を果すことが出来たという、安心感を覚えると同時に、何か偉大なもの、神々しいものに直接向いあっているという、言いしれぬ緊張を覚えることでしょう。その印象の強さは最初の参拝のときも、三十数年経った今でも変わることがありません。

「神々の国」ということ、国譲りの聖地と言ひ伝えられ、神在(有)月に神々が集い寄り来る出雲大社の西約一キロの稲佐の浜に夕日がしずむ頃ともなりますと、地元の大社の町筋のあちこちでは「ばんじまして」との声がかかります。

「こんばんは」に近い日暮

れ時の挨拶の言葉なのです。いわゆる出雲弁は、たとえばイをエ、シをス、ヒをフ、などと発音する一種独特な方言で、初めてのお国帰りのとき宿舎の玄関で「お帰りなさい」と口々に(おくにことばで)迎えられたときの何とも言えぬ感動を今でも忘れておりません。本当に「心(魂)」のふるさとに帰ったのだと改めて実感したものです。

神迎祭は旧暦の十月十日(今年は十一月十一日)の午後七時、稲佐の浜でかがり火をたき、大きな榊の神籬を立て祭壇を設けます。

そして、三方には、八百萬の神々の水先案内として「龍蛇神」を乗せて、海からお集まりになられる神々を出雲大社の管長先生を始めとする神職の方々が迎ええし、大社町をお練りして、出雲大社の神楽殿にお連れするのです。地元の人々は、神迎祭の事を御忌祭と呼び、昔は歌舞音曲をとどめ、物音をたてず、ひっそりと謹慎斎戒の生活をしたそうです。

さて、出雲大社にお迎え

した神々は、境内の東西にある十九社という社殿にお泊まりになります。(普段は空の社です)ここを旅社として、八百萬の神々は翌日から一週間、大国主大神を中心に来年の国政、人間の寿命、人と人との出会いと縁、運勢などを相談されるのです。

この事は「神集いに集い神議りに議り給う」と古い書物に残されているもので、決して私共が捏ち上げた事ではありません。

一方、出雲以外の地方でも、多くの地方で、九月の終わりに十月の初めには出雲への神送りが行われます。

そして、十月の終わりあるいは十一月の初めには出雲からの神迎えが行われています。

またその時、この神だけは残られるとするいわゆる留守神の信仰もあり、その分布は北は東北から南は九州の果てにまで及んでいるのです。

また、この厳肅な神迎祭の原始の姿を八十二代出雲国造の千家尊統公は自身の

著書「出雲大社」の中で、「陰暦(旧暦)の十一月の申の卯の日に行われる新嘗祭にそなえる物忌みであった」と解釈しております。そして、大事なまつりをおこなう為には、広い地域において長期にわたる物忌みに服する例として、兵庫県加古川郡の日岡神社とか千葉県館山市の安房神社をあげていきます。

出雲(大社)への神集いについては、今のところ「興義抄」、「和歌童蒙抄」によって平安時代には確認出来ません。後書には「十月は万ノ神たち出雲ノ国へおはし坐すに依て神無月と云」とあり、かなり古くからこういう信仰が人々の間にあったことが窺えます。

さて、今年も十一月十一日(金)から十三日(日)まで、私共出雲心友教会でも神迎祭に参列します。

不況に続く不況の最中ですが、今年も頑張って神迎祭にはお国帰りを致しましょう。そして「こうして」今日あることに感謝して、ひとり静かに祈るうではありませんか。